陽林会（第 12 回）奈良県　室生の旅

平成 29 年 6 月 19 日

平成 29 年 6 月 16 日（金）林陽寺駐車場を 7 時に出発、岐阜駅にて名古屋・岐阜組の 10 名が乗車し、総勢 22 名にて室生に向かう。長良川を一路南下し、東名阪長島より亀山、亀山から西名阪を順調に、11 時ころ最初の訪問寺院大野寺に到着。本堂のご本尊に「般若心経」を唱えて、ご挨拶。お庫裡様より説明を受ける。以下、室生寺、室生龍穴神社等をお詣りし、3 時頃室生をでて 7 時頃帰る。ご苦労様でした。

大野寺（おおのでら、おおのじ）

奈良県宇陀市にある真言宗室生寺派の寺院。山号は楊柳山、本尊は弥勒菩薩。伝承では白鳳 9 年（681 年）、役小角（役行者）によって草創され、天長元年（824 年）に空海（弘法大師）が堂を建立して「慈尊院弥勒寺」と称したという。役小角は修験道の開祖とされる伝説的要素の多い人物であり、空海が堂を建立との話も創建を宗祖に仮託した伝承とされており、創建の正確な経緯は不明である。近くにある室生寺は興福寺系の僧によって創建・整備されており、大野寺の磨崖仏造立にも興福寺の僧が関係していることから見て、興福寺と関係の深い寺院であったと考えられている。寺は明治 33 年（1900 年）の火災で全焼した。その際、本尊をはじめとする仏像などは持ち出されたが、現存する建物はすべて火災以後のものである。

弥勒磨崖仏（史跡）　宇陀川の対岸に位置する高さ約 30m の大岩壁に刻まれている。岩壁を高さ 13.8m にわたって光背形に掘り窪め、その中を平滑に仕上げた上で、像高 11.5 メートルの弥勒仏立像を線刻で表す。前述のように、興福寺の僧・雅縁の発願により、承元元年（1207 年）から制作が開始され、同 3 年に後鳥羽上皇臨席のもと開眼供養が行われたものである。作者は宋から来日した石工・伊行末（いぎょうまつ/いのゆきすえ）の一派と考えられている。山城国笠置山にあった弥勒の大石仏（現在は光背のみが残る）を模したものである。像の向かつて左手の岩壁下方には円形の区画内に種子曼荼羅（尊勝曼荼羅）を刻む。名称は「大野寺石仏」。また、桜で有名な寺でもある。見事な枝ぶりを見せる樹齢約 300 年のシダレザクラが花を咲かせると、その他の桜も次々に咲き、多くの花見客でにぎわう。

「私の古寺巡礼」(白洲正子筆)

大野寺の歴史は、それよりもはるかに古い(室生寺建設より)。寺伝によると白鳳 9 年(681)、役の行者の草創で、後に弘法大師が室生を開いたとき、「室生寺の西の大門」としたと伝え、はじめは弥勒寺と称していた。ここは古代の巨石信仰の遺跡で、その岩境に仏を刻み、のちに寺が建立されたのではなかろうか。それは室生川が大きく迂回する地点にあり、昔はそういう所を神奈備(かんなび)と呼んだ。神が依るところ、なびくところ、の意である。(中略)神佛の混淆は、

まず目に見えるものとして現わされたのである。

室生寺（むろうじ）

ポスターより

奈良県宇陀市にある真言宗室生寺派大本山の寺院。山号は宀一山（べんいちさん）。開基（創立者）は賢憬（賢璟）、本尊は釈迦如来。宇陀川の支流室生川の北岸にあり、室生山の山麓から中腹に堂塔が散在する山岳寺院である。平安時代前期の建築や仏像を伝え、境内はシャクナゲの名所としても知られる。女人禁制だった高野山に対し、女性の参詣が許されていたことから「女人高野」の別名がある。

到着後門前の有名な旅館「橋本屋」で精進料理の昼食をいただき境内へ。お坊さん案内で鎧坂から金堂、弥勒堂、法堂、五重塔へ。見る建物や仏像は、国宝・重文ばかりといった感じ、歴史の重みを感じる。

有名な五重塔は本堂（灌頂堂）の横の石段の上に優しく立つ。屋外に立つ五重塔としては我が国で最も小さく、また法隆寺五重塔に次ぐ古塔である。檜皮葺の屋根や丹塗りの組物が、奥深い樹林に包まれて格別の風情がある。平成 10 年の台風により大きな損傷を受けたが 2 年後に修復された。さらに奥の院へは、塔の右の道を奥に進み 720 段の石段を登れば奥の院。御影堂や信者さん達位牌堂がある。御影堂は弘法大師 42 歳の像が安置されている。毎月 21 日にお開張されるとか。古希を迎えた五木寛之氏も登ったとか。参加された方の大半が登られ、よき思いでとなった。

「私の古寺巡礼」(白洲正子筆)

室生寺の北山は、南側とは別の世界の趣きがある。時代もちがうし、思想も異なる。これは弘法大師の信仰と無関係ではあるまい。大師が室生にいたという確証はないが、高野山へ移る以前に、このあたりを歩いたことは確かで、室生の地にも立ちよらなかったはずはない。宇陀の大蔵寺は「元高野」と呼ばれるが、室生の「女人高野」も、あるいは道場の候補地の一つだったかもしれない。が、せますぎたため、高野山に決定した。そう考えても不自然ではないと思う。奥の院は、そのとき弘法が通った道で、いってみれば巡礼路の一種である。(中略)　急な石段を一直線に登り、くたくたになって頂上へたどりつく。そこには大師を祀る御影堂が建ち、眼下にはすばらしい景色がひらける。

室生龍穴神社

室生寺の奥に鎮座する、水を司る龍神を祀る『室生龍穴神社』。境内地のさらに奥には、巨大な岩山の洞穴に龍神が棲むとされる「吉祥龍穴」がある。古くから雨乞いの儀式が行われてきた聖地で、正面に立つと自然と背筋がピンと伸びる。杉の巨木に圧倒される。近くに、曾爾という地名があるが、そこはもしかすると、水銀の鉱脈があったかも知れない。弘法大師の旧跡には意外と水銀にまつわる伝えばなしも多い。